雪椿通信

新潟県立近代美術館だより
Spring & Summer 2016
vol.46

美術館所感

館長　徳永健一

「思った以上に良かった、面白かった。彼はきっと繊細な男でないのかな」。私が若いころから今日まで折に触れてご指導いただき、まもなく90歳となられる先輩が話しかけてこられました。その展覧会は会田誠展です。作品を通して作家の心も理解しようとする、若々しい感性に改めて敬服しました。

税金を使う公立美術館が要求される目標の一つは、多くのお客様から見ていただくことですが、昨年度の展覧会は、その目標にはすこし届かない結果となりました。ひろしま美術館所蔵品展「印象派への旅」、「生誕100年 濱谷浩」、「会田誠展」、「生誕100年 亀倉雄策と『クリエイション』」と続いた企画展は、すべてが当館の学芸員が精魂を傾けて作り上げた自前の展覧会、一年間の企画展のほとんどを巡回展に頼らずやり遂げるのは、昨今の地方公立美術館では皆無に近いと思われます。実行委員会に参加してくださったメディア各社にも厚くお礼を申し上げます。そして質の高い展覧会をやり遂げた職員に誇りを感じています。自前の展覧会は学芸員のスキルアップには絶対必要なことだと思っています。

©1984 二馬力・GH

でも結果として、それぞれの展覧会の客層がコアの方から広がりが見られなかったことは、今後に向けた反省点としなければなりません。

いまジブリの大博覧会が開催され連日にぎわっています。今年度は貪欲に"集客"を第一目標としたいと思います。「ジブリの大博覧会」は当初計画した「種田陽平×思い出のマーニー」にジブリの30年の歴史を詰め込んだ、味の濃いものに変身しました。6月のモネ展は東京展では76万人を記録した睡蓮の連作を含む90点を一挙大公開します。東京、博多、京都など大都市に伍して、近県や首都圏からもお客様に来ていただきたいと願っています。これだけの作品群が一堂で見られるのはマルモッタン美術館の開館80周年の節目を祝う意味があったためで、おそらく私が生きているあいだに日本で再び見ることはないでしょう。9月の「ヴェネツィア展」は500年の港町ヴェネツィアの歴史を、ボストン美術館所蔵の130点の作品で紹介します。最後は12月から正月にかけ「良寛と巻菱湖」、幕末に大きな足跡を残した書風も生きざまも異なる2人の書を展示します。当館としては約10年ぶりとなる書の展覧会で、展示される良寛の書には重要文化財も含まれます。

クロード・モネ《テュイルリー公園》1876年 油彩,カンヴァス54×73cm
Musée Marmottan Monet, Paris © Bridgeman-Giraudon

どの展覧会も自信をもって見ていただけるものです。多くのお客様がきっと満足していただけるものと確信しています。

スタジオジブリの夢の世界へ！

船着場の重厚な石の門をくぐると目に飛び込んでくる青い窓。そこはマーニーの部屋。一歩足を踏み入れた瞬間、あの映画の一場面が鮮やかによみがえります。

あれっ、今そこに「まっくろくろすけ」が見えたような…。これまでスタジオジブリの映画に登場したあれもこれも、みんな近代美術館に大集合。ジブリファンの皆様はもちろん、どなたでもきっと御満足いただけることでしょう。ジブリの夢の世界をまさに五感で楽しむことができる展覧会、「ジブリの大博覧会」好評開催中です。

（副参事　宇賀田和雄）

©2014 GNDHDDTK
Production Design Yohei Taneda

ようこそ、モネの「秘密の花園」へ

話し手：マリアンヌ・マチューさん
（マルモッタン・モネ美術館副館長、本展監修者）

© 神戸シュン／ NTV

Q.モネ展がいよいよ新潟で開催されます。本展の一番のみどころを教えてください。

今回の展覧会のユニークな点は、画家であるモネが生涯手元に置いていた自分の作品や、モネが収集していた友人たちの作品というプライヴェート・コレクションが展示されることにあります。この展覧会を訪れる方々は、ぜひモネの自宅に招かれたようなつもりでいらしていただければと思います。

Q.「秘密の花園」という言葉を展覧会のキーワードにされましたが、その意味は？

「秘密の花園」をキーワードにした理由は、本展に出品されるモネの作品が、他の作品とは全く違うものだからです。それらはモネの家にあったもので、モネが亡くなった後、世間に「発見」されました。モネが自分の寝室に飾り、決して他人には見せなかったものです。つまり、モネの心のなかにあったもの。私が、「秘密の庭」と呼ぶのはそのためです。

Q.新潟では、《テュイルリー公園》が特別出展されます。この作品は、ジョルジュ・ド・ベリオ（1828－1894）というすぐれたコレクターが、まだモネが無名だった時代に購入したものだそうですね。

ジョルジュ・ド・ベリオという人は、印象派の若い画家たちが才能に溢れ、独創的な芸術家であることを、いち早く直観的に見抜いた数少ない愛好家でした。ある意味で、ド・ベリオ自身も歴史に残る人物といえます。当時、この作品の美しさを理解できた人や、将来これほど重要な作品になることを予測できた人は殆どいませんでしたから。

Q.この展覧会には、モネの最晩年の作品が数多く出品されていますね。その激しい筆触や強烈な色彩を見て、驚く人が多いと思いますが。

最晩年の作品は非常に貴重なものです。晩年のモネは、作品を発表せず、売ることもありませんでした。それらは、ほぼマルモッタン美術館だけが所蔵しています。他では見ることができません。

晩年のモネは、自分がやっていることが新しく、常軌を逸したものに見えることが分かっていたのでしょう。これは私の考えですが、モネは時間を無駄にしたくなかったのだと思います。批評家を相手にする時間が勿体なかったのでしょう。モネがこれらの絵を描き始めたのは75歳の時で、亡くなった時は86歳です。自分がやっていることを人に説明している暇はありませんでした。モネはただ描いていたかったのです。人々がこれらの作品の革新性をやっと理解したのは、第二次世界大戦後のことでした。それほど長い時間がかかりました。これらの作品によって、モネを現代美術の父であると言うことができるでしょう。

素敵なお話をありがとうございました。

聞き手：平石昌子（学芸課長代理）

クロード・モネ《睡蓮》（部分）1917-10年 油彩、カンヴァス 100×300cm　Musée Marmottan Monet, Paris © Bridgeman-Giraudon

私とこの1点

高松次郎《カギ#223》

画面に、本物の留め金、フックが見えます。そこから伸びる影にはフックにかかった鍵が見えるのに、実体の方には鍵がかかっていない…そんな不思議な作品です。

高松次郎の作品に初めて出会ったのは、当館でなく他の美術館で、この作品と同じ「影」の鍵が描かれたシリーズでした。幼かった私は、作品の前に立ち、影の主を探して作品を照らすライトを見上げてしまいました。あるはずのものが無いというパラドックス的面白さと、影の静謐な印象を感じたのを覚えています。

そして、高松次郎との久しぶりの再会となったのが当館の《カギ#223》です。以前の記憶が甦るのと同時に、それとは違った感想が生まれました。作品が完成時から変化することはほとんど無いとすれば、私たち見る側が変わることによって感想や印象が変わるのでしょう。私はもう、高松の「影」のシリーズを見ても、天井のライトを振り返ることはないのです。それは、作品について知識がある、と言えると同時に、寂しいことであるのかもしれません。

しかし、それだけその経験が、かけがえのないものだったのではないでしょうか。

何年か後、またこの作品と出会った時に、私はどんなことを思うのでしょう。それは今の私にはわかりませんが、変化するのかもしれません。もしかしたらこんな風に変わる作品への思いが、美術鑑賞の面白みの一つなのかも…それを改めて気づかせてくれたのが、この《カギ#223》でした。

（学芸員　松本美樹）

高松次郎《カギ#223》1968年　当館蔵

見附市との連携活動

▲竹田康宏作品のマネをする

▲ワークショップ後のお絵かきでも、カポグロッシの形が出現

当館が立地する長岡市の隣、見附市の重点事業に、0歳から18歳までを視野に入れた「見附市18年教育」があります。この事業の一環として、平成25年度から、当館が見附市の保育園児の〈鑑賞〉に関わることになりました。

幼児に対して「鑑賞なんてできるはずがない」と考えている人は、たぶん、とても多いのです。けれど、感性の柔らかい時に優れた造形物をみて、それを心に刻むことは、必ずよい影響を生むはずだと思って機会をうかがっていた筆者は、普段美術館を訪れることがほとんどない保育園の側から積極的な関わりを依頼され、躍り上がりたいような気分になりました。

幼児の基本は「遊びながら学ぶ」こと。そして、もう一つ大事なのは、彼らには鑑賞のための知識や体験が足りないということでしょう。そこで、テーマに据えたのが、体験しながら遊べる、全身を使った「五感での鑑賞」です。

▲並べたら、みんながつながった!

◀舟越直木作品の中に入って見上げる

まずは当館の屋上庭園をめぐります。形をみるのはもちろん、手触りや温度を感じたり、のぞいたり中に入って見上げたり、あるいは耳を寄せて音を聞いたり…。子どもたちは、まさに五感を使って、全身で野外彫刻の作品と関わります。展示室では身体を使って「まねる」ほか、目や頭を使って「さがす」「みつける」「くらべる」ことをしながらみんなでおしゃべりします。園児たちは「あー、おもしろかった」と目を輝かせていました。

平成26年度からは保育園に出向いてワークショップを行う「出前講座」も行うようになりました。当館所蔵のカポグロッシの作品画像をみてかたちや色についてたくさんおしゃべりした後、カラフルに色づけした紙器製造会社の工場から出る端材を並べて遊びました。ここでは、並べる楽しさからくる造形感覚のほかに、グループワークによる人間関係の形成もみることができました。出前講座でも園児たちは楽しく遊んで大興奮でした。

保育園からは、「子どもの（美術館での体験を）話す表情から（美術館に）いってみようと思った、と保護者の声があった」「粘土遊びの際に彫刻を見た感動が意欲につながり、立体的に大胆に作り出す姿があった」などの成果が報告されています。

しばらく、幼児の鑑賞からは目が離せそうもありません。

（学芸課長代理　宮下東子）

鑑賞教育活動の現場から

幼い頃からスキーや読書の楽しみを知っている子どもは、やがて親になった時、我が子を誘っていくでしょう。「美術館」や「鑑賞」も似ています。鑑賞は美術館での活動がすべてではありませんが、本物に触れる意義は大きなものがあります。2年連続で来館され、対話型鑑賞をされた先生から次のような感想をいただきました。

帰りのバスの中で「楽しかった」「また来たい」と子どもたちがつぶやいていました。本物にふれることで子どもたちの感動は大きく変わりました。学校の教室で図版を見るだけでは感じられない大きな感動が味わえることがよく分かりました。作品から「読み取る」楽しさやお互いの感じ方を伝え合う活動を大切にしていきたいです。

子どもたちの柔軟で豊かな発想には、私たち大人はかないません。対話型鑑賞は多様な見方や感じ方を学び合い、すべてが正解になりうる魅力的な活動です。そして、創造性のみならず新しい意味や見方、感じ方、自己肯定感をも育むことができます。美術館では出前講座や出張授業、研究授業の連携等も随時行っています。今後も自己肯定感を育みやすい鑑賞の活動を学校との連携を図りながら工夫・改善し続けていきます。

（学芸課長代理　青木善治）

Catalogue Guide

郷土に残る小山正太郎と不同舎の画家たち

| 会期 | コレクション展第4期　2015年1月4日～3月1日

―昨年度開催した「郷土に残る小山正太郎と不同舎の画家たち」では、田中本吉について一気に調査が進みました。地元長岡出身で、小山の不同舎に学び、小山代表作《仙台の桜》（当館蔵）の摸写があることや、市内の山谷沢小学校に作品があることは知っていましたが、出品作や新出の作品発見など、本吉の足跡がいろいろと判明したのです。

本吉は、不同舎の最初期に学んだ一人で、中村不折や二神純孝（下村為山）と親友でした。明治23年、結婚による本吉帰郷の際、その二人の惜別画が残っており、そこから当館蔵《小春ノ日和》の小泉成一に、本吉が務めていた神奈川尋常師範学校を引き継いだことなど、当時の不同舎の画家たちの繋がり、様子が見えてきました。また、その様子が後年の小杉放菴の記述どおりだったことも確認できました。

長岡市に図書館互尊文庫を作った野本互尊（恭八郎）との親交も深く、戦前の互尊文庫に本吉の作品が展示されていたこともわかりました。しかし、長岡の空襲を避け、本を疎開させようとしていた矢先、互尊文庫は空襲に遭い焼失してしまいました。そしてその疎開先が長岡市内の山谷沢の田中家であったということ、また、長岡市内の平潟神社に奉納していた佐渡の風景画も空襲で焼失してしまっていたことなど、判明する情報に一喜一憂しながら本吉像が近づいてきました。

地元での地域、農業振興の傍ら、写生を続け、残された写生帖には不同舎らしい水彩写生が見受けられるなど、絵に対する思いも伝わってきました。点の情報が線で結ばれ、そして面的に広がりを持つというのはこういうことなのでしょう。

この調査の結果を展覧会として紹介し、小さいながらも冊子に纏められたことは、偶然が重なったことも大きいのですが、知られていない画家の記録を纏める、学芸員としての醍醐味でした。そして調査研究の図版だけでは語り尽くせないことを、文字記録として研究紀要にまとめられたこともまた、学芸員冥利でありました。

（専門学芸員　松矢国憲）

キンビのおすすめ

当館は豊かな自然に囲まれています。信濃川に沿って広がる緑は四季折々の表情を見せてくれます。

新潟らしい水墨画のような冬景色も風情がありますが、わたしのおすすめは、春。

なぜなら、雪がとけて、ようやく美術館周辺を散歩できるようになるからです。「おあずけ」が長い分、感動もひとしおです（笑）。

近隣の「雪鹿」さんのジェラート片手に、信濃川沿いの風を楽しんでから屋上庭園を散策する、というコースがわたしの定番です。

この写真は昨年の4月半ばに撮影しました。みなさん、ここがどこかわかりますか？ヒントは、この見事な桜と、黒い球のようなシルエット。お散歩しながら、探してみてくださいね♪

（嘱託員　酒井真李）

お世話になってます　シリーズ その8

印刷機

資料作り等で活躍しているモノクロ印刷機です。館内の作品リストもこれを使ってスタッフが1枚1枚丁寧に仕上げています。当館にお越しの際は、ぜひリストをお手に取ってご覧ください。手作りのぬくもりを感じていただけたら幸いです。

（総務課主任　重高優子）

編集部からのひとこと

このクッキー、モネがお気に入りだった料理を再現したレシピ本をもとに、佐藤友紀嘱託員が焼いたはちみつクッキー。上品な甘さで、これが、モネが愛した味かと、ひとくちひとくち感慨深く味わいました。林綾野著『モネ 庭とレシピ』（講談社、2011年）は、モネ展会期中にミュージアムショップにて販売予定。料理から印象派の巨匠に思いをはせてみては？

（主任学芸員　伊澤朋美）

新潟県立近代美術館だより　雪椿通信　第46号

編集・発行　THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館
〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL0258-28-4111(代)　FAX0258-28-4115
http://kinbi.pref.niigata.lg.jp/　e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷　株式会社 山田写真製版所
〒950-0064 新潟県新潟市東区松島1-5-14

発　行　日　2016年4月12日